

研修のまとめ

～4年 算数科「2けたでわるわり算」～

平成29年10月2日

両津小学校

椎 一夫

1 本時の授業実践より

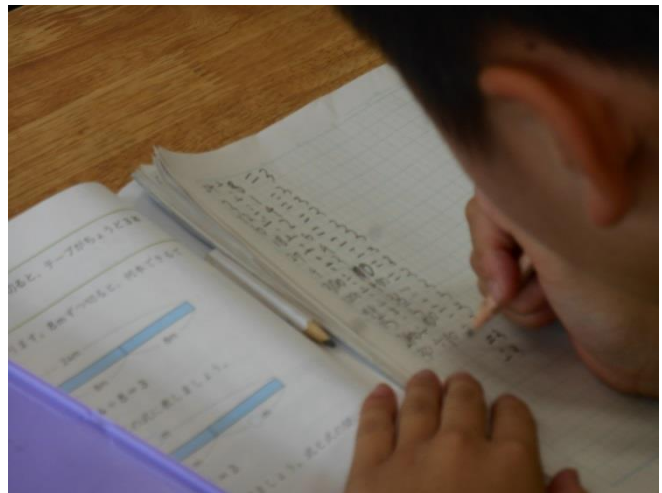
(1) 本時のねらい（身に付けたい学力）は達成できたか

→（21人中21人がねらい通りの活動を行っており達成した）

本時のねらいの評価領域は、算数への意欲・関心・態度であり、「商が同じときのわる数を□、わられる数を○としたときの、□と○に入る数を見付ける」としていた。見付ける活動を通して、算数への関心・意欲・態度を高めることをねらっているため、数で評価するのではなく、きまりの面白さやきまりを使う便利さとして「きまりを使って当てはまる数を見付ける」と、評価規準を設定した。

見付け方を発表し合った後に、再び当てはまる数を求めている。自力解決できなかった児童も、きまりを用いて例式をつくっていた。

本校の研究主題が「思考力の向上」にあることから、公開授業場面への配慮や思考・判断・表現の評価規準の妥当性を更に検討したい。



(2) かかわり合いで、考えの広がりや深まりがあったか

→きまりを確認する場面でのかかわり合いで手応えを感じた。

本時におけるかかわり合いを通して、次のようになることを期待して取り組んだ。A児は、自分の説明の声を聞き吟味すると共に、相手に合わせて説明の仕方を修正する。B児は、聞いたり説明したりすることで、筋道立てて（論理的に）話す。C児はきまりが分かる。

式を上下に並べて、かかわり合いを通して比較と検討を行い商が同じときのきまりに気付かせようとした。比較する目的やきまりの見つけ方への理解が浅い子供は、きまりを言葉でおさえる半分かり状態であった。その後、きまりの有効性を確認する場面において、「確かめ問題→きまりの確認→確かめ問題→発表」において全体やペアーのかかわりを入れたことで、「あっ、なるほどね」という呟きが複数聞くことができた。実感をもち理解を深めていた。

(3) 書くこと、その他有効であると思われる手立て

指示通りに書くこと自体には慣れており、自分の考えも付け加えていた。自分で図や式をかいて、それを文字で説明することにこれから取り組みたい。

(4) 単元末のテスト結果

全国平均を100としたとき、学級平均は技能114、数学的な考え111、知識104であった。知識の定着に向け繰り返し振り返ったり、個別指導したりする。

2 授業改善の取組を振り返って(今後の研修に向けて)

(1) 次のようにすると授業改善が進む

- ◎児童の学びの姿から、指導における課題を見出し、改善し続けることで児童が変わる。
見出した課題や進捗状況を共有し合うシステムを取り入れる。
- ◎校内の課題に沿い個々にとらえている課題を解決していくことで、授業改善が進む。指導案検討会を指導書の読解、授業公開を誰からでも学ぶ機会にする。
- ◎バランスのよい学力を目指したい。単元を通して付けたい力を設定する。

(2) p d c a への取組から (■…課題, ●…改善の取組, ◆…その結果)

今回、快く単元を通して授業をさせていただいた。有り難かった。「1けたでわるわり算」のテスト結果では、学力領域に差があり、特に知識・理解面の定着が弱かった。■「九九の定着とバランスのよい学力」を課題にした。●指導書に沿った指導計画と百マス計算を授業に取り入れた。◆百マス計算により集中力と九九は定着してきた。繰り下がりのある引き算に課題があり、筆算は困難と感じ担任に相談した。

次に、答えは言えるが、理由を言えない児童が気になり■「答えを導いた思考の過程を説明する」を課題にした。●友達の説明を聞いて真似させようと、説明を聞き合う場をつくる。丁寧なあいさつをさせる。聞くことから始めさせた。◆自分も説明せざるを得ない。でも、聞くことから始める。という設定が、「同じようなことを言えるように話を聞こう」とする姿になった。



また、振り返りにまとめを繰り返し書いているだけの児童が気になり、■「児童に問い・願い、まとめ、振り返りを活用させる」を課題にした。●教師のねらいもあるので問い・願いは課題（次を通しての時もあった）、その時間のゴールとして説明した。まとめには、問い・願いに対応したもので児童と共に教師のねらいも取り入れた。振り返りは、活動の過程に対して、自分を主語にして書かせた。解決の見通しに対して自分はどのように取り組んだか、どのようなことを考えていたか等である。◆自分はまだ、まとめの内容を理解していない。理解できるように～をして欲しい。～さんのこの説明でわかった。等、自己の理解や解き方をメタ認知的にとらえるような姿となってきた。

更に、自力解決が進まず毎回説明を聞く児童が決まっていることから■「児童に解決の見通しを持たせる」を課題にした。●考えるための方法と内容を繰り返し確認し明確にしていくことを心掛けた。◆比較する活動は行っていたものの、見通しと比較するということをつなげてとらえていない子供が半数はいたのではないのか。比較する目的意識とどのようにして比較したらよいのか分からなかったのではないだろうか。

今回の課題一般化や有効性を確かめる場面で、上下ではきまりを使うことはできていたが、横に並べると、きまりを使えなく児童が半数見られた。子供にとってのきまりは、知識としてのきまりであり、半分かり状態だったと思われる。きまりが「生きて働く知識」になっていないのか、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」につながっていないのか、今後研修を進めたい。